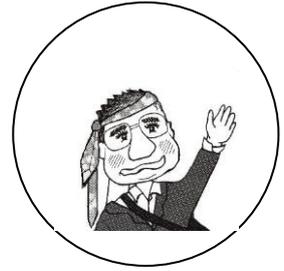


# 大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 「道を歩く人がやってきた」③

「道」とは何か、を考えるまえに、世間を騒がす世界平和統一家庭連合（旧統一教会）について語ってみよう。

どうみたって、あれはカルトだよ。そもそも日本人は、曖昧に信仰してきた。あるときはキリスト教徒のふりをしてクリスマスを祝い、お正月には神社で初詣を楽しみ、お葬式にはお坊さまに経をあげてもらおう。とにかく「ちゃんぷる」なのだ。これが良いのか、良くないのかわが輩には分からない。たぶん「文化」として良いのだろう。それを「ゲンリ」という箱に閉じ込めようとするのが旧統一教会だといえる。

岡本亮輔北海道大教授によると、新宗教などの宗教像を「キリスト教モデル」と呼ぶそうである。(毎日新聞 2023-02-01) ①信仰、②所属、③行為が三位一体になっている。欧米などのキリスト教社会では、この信仰形態は長く続き、それなりの歴史的評価を得ている。

①自分の信じる教義により、②その教団に所属し、③その教えに沿うように行動する。当たり前のように思える。ところが①誘導されて信じる教義に、②いつの間にか隷属させられ、③人格的成長ではなく、教団の拡張のために行動する、となると問題である。

2世信者は、順序が②所属、③行為の次に、①信仰がくることになる。生まれながらにマインド・コントロールの世界に入るおそれがある。

信仰プロセスで問題となるのは、②所属（教団）である。だれでも自分の所属する組織の悪口を言われると、カッとなり反発する。組織の善悪でなく、なによりも自分が否定されたと感じるからである。だれかに否定されて、真面目に「自己検証」に至る人など殆どいない。だから「教団のため」という観念がはたらいたら、さっさと逃げたほうがよい。

あえて「教団のため」というなら、その教団が教祖や組織、構成集団のためでなく、他者のために生きているか、をよく観察してみる。これが最も大事なことである。

岡山県のお坊さんに、「インドに、どのような教え(道)を広めようとしているのですか？」と聞いたとき、「とにかく仏教徒を増やすのが先だ」と言ったので、絶句したことがある。

わが輩の学生時代、旧統一教会を「ゲンリ」と呼んでいた。大学に原理研究会というのがあった。一度だけ、地味な服装だが可愛い女学生信者と遭遇したことがある。彼女は学生運動のリーダー的存在Sに会いに来ていた。学友に「あの娘はだれ？」ときいたら「ゲンリ」

だと言った。反体制うんぬんのときに、呑気に「カミサマ、オトウサマ」などと言っている彼女を、若きわが輩は「バカじゃないの」と憐れんだ。

昨年末に、慶応大学の元活動家と一献交わした。彼が言うには、女学生信者二人がタッグを組んで勧誘にきたそうである。一人は可愛い子で、ソフトタッチで接近してきた。明らかに「活動家」をターゲットにしていた。「あいつらは、半世紀も前から、同じことをしている！」と憤った。

彼の話聞いて、S（故人）の事例を思い出した次第である。

近年、Sと関係のある市民活動の会から「News Letter」が送られてくる。かつての勇ましい活動家たちが執筆している。それによると「日大反原理闘争」なるものがあつたそうである。惜しくもその闘争では、追い詰めたものの勝つことができなかった。某執筆者は「勝共連合＝統一教会を今度こそ葬り去れ、彼らの大好きな地獄に送ってあげよう」と檄を飛ばしている。

某執筆者は、「朝日新聞襲撃事件」、「世田谷一家殺人事件」、「脱会信者世界日報編集長殺人事件」、統一教会撤去運動にかかわっていた「石井紘基衆議院議員殺人事件」も、旧統一教会と関係があるかも、としている。推測か、憶測か分からないが、面白い話である。

今年初めに、Sの妻女から『レ・サンジュ』（天使）という小冊子が送られてきた。

Sは、奇才の文筆家であつた。わが輩のような愚筆には、とても彼のような鋭敏な文章は書けない。その小冊子に、Sと立松和平（作家）に親交があつた、と書かれていた。

立松和平の名はヒッピー仲間から聞いていたので、デビュー当初から名前だけは知っていた。わが輩がインドを去った約半年後にやって来た。立松は23歳で結婚、妊娠した妻を実家に預け、インドへの旅（3ヶ月間）にでた。立松はカルカッタに上陸、日本の寺で七日間の断食行をすることになった。その日が迫ってくると、他の貧乏旅行者はそそくさと出て行ったが、立松は残った。わが輩もお断食経験があるが、インドとお断食が、立松に何ものを与えたのか、わが輩には分からない。ましてや、Sと立松が近しかったことなど知る由もなかった。Sと立松が同じくするものは、早婚、縷々転職、文学であろう。二人とも、迷い道を彷徨っていた。

今から思えば、わが輩も迷い道で喘いでいたのかもしれない。よく考えてみると、「道」は喘ぎの中にある。ころんで、すべって、まよい道。いつも歩くの曲り道。たまには寄り道楽しいな。